

## 主に導かれ、 主を誇りとして生きる

Ⅱコリント10章12～18節

2021年10月24日

松田 基子 師

聖書は、私達人間は創造主である神様が、愛を込めて、御計画に従って命と使命を与えて、この世界に送り出して下さっている存在であることを教えています。私達はその事を信じて、

『人間の尊さと、保証を、  
神様の愛のご計画による、創造』

に置いています。この一点から全ての人は、人間の如何なる条件にも、判断されることなく、

『人は人として、尊ばれるべき尊厳を、  
神様から与えられている』

事を信じています。

この事を知ることが人間にとって一番大切なことです。それは創造主なる神様を知り、神様に結ばれる事によって、知る事が出来ます。自分は神様の愛の御心によって、この世に送り出された事を信じて、

「私は今この地上に、神様から、

『生きよ、あなたには  
私を与えた使命がある。』

との御声を聴いて生かされています。」

と言う事が出来る人ほど、幸せな人はいません。自分の存在の寄り所を神様に置く事によって人生に襲って来る、様々な存在否定を乗り越えて行く事が出来ます。

一方、神様を知る事無く、神様から離れ、自己中心に生きる人間の一番の不安は、何でしょうか。

『自分の存在の保証を持たない存在不安』です。神様から離れた人間の一生のエネルギーは、この自分の存在不安を埋める事に費やされます。人はそのために、自分が

『一生懸命になれること、夢中になれることを求めて、そこに精力をつぎ込み、その成功感で、自分の存在価値を見出します。』

でも、人生は、そんな成功ばかりではありません。失敗も多々起こります。すると、成功や有用性

に、自分の存在価値を置いている心に、

『自分には、存在価値が無い』

と言う、存在不安が生まれます。しかし、それでは生きて行けませんので、自分の存在価値を得るために、周りとの比較をし始め、自分よりも劣っている人を見つけて、

『私は、あの人よりもまだ』

と、その人に見つけ出した差異を頼りに、自分の存在に価値を与えます。

そのような考えから他者への批判、非難、誹謗、中傷が起こって来ます。今日の社会構造の複雑化は、愈々(いよいよ)人間の根底に、存在不安を抱かせ、その捌(は)け口が誹謗、中傷になって、大きな社会問題となっています。人間どうしが比べ合って自分の存在価値を得ようとする世界の中で、私達は、どの様に生きれば良いのでしょうか。使徒パウロの生き方から学んで参りましょう。

神様のみを見上げ、イエス・キリストに命を献げ、神様からの使命に生き抜いた使徒パウロも、誹謗、中傷を受けました。コリントの信徒への手紙第Ⅱの10章には、パウロに向けられた非難に対して弁明が記されています。そもそも、誰がパウロを非難したのでしょうか。パウロは自分の使命が、異邦人伝道にある事を示され、地中海の異邦世界へ伝道しました。パウロがコリントに足を踏み入れたのは、紀元51年で、この地にはまだ、誰もキリスト教を伝えてはいませんでした。パウロは、コリントに1年半滞在して、コリント教会を立て上げました。パウロはコリント教会の産みの親、自立への道を整えた、育ての親でした。

彼は、教会が自分達で活動出来るように整えると、教会を長老達に託して、第二伝道旅行を終え、紀元52年にイスラエルに帰り、エルサレムの使徒達に挨拶をして、異邦人伝道の拠点であるアンティオキア教会へ戻りました。翌53年、パウロは再び第三回伝道旅行に出発しました。小アジア地方の内陸部を通過して、アジア州の中心都市、エフェソに来て、2年間キリストの福音を語りました。その間、エーゲ海を挟んで、西側のコリント教会では、多くの問題が起こって

いました。様々な問題の中に、パウロ批判がありました。それは信仰の根本を揺るがすものでした。

当時、地中海世界では哲学や、宗教を教え、巡回教師がいました。ユダヤ教は勿論ですが、キリスト教界にもそういう人がいたのです。パウロは第二伝道旅行を終えると、エルサレム教会に挨拶に行っていますから、コリント教会の設立は、巡回教師の耳にも入った筈です。その人は早速コリントに向かって出発しました。しかし、この人物は大変問題のある教師でした。それは見かけからは、分からない事でした。風貌はパウロよりも格好良く、非常に話しが上手く、人々の心を捉えることが上手だったようです。

それで、コリント教会の人々は、その言葉の巧みに引きずり込まれて、

「良い先生が来た。」

と歓迎し、その教えに聞き入ってしまいました。ところがパウロに言わせると、この人は、偽使徒、偽教師で、人々を自分に引きつけるために、創設者のパウロを非難し、中傷し始め、コリント教会の信仰を揺るがし、教会員を分断させてしまいました。先週の8章では、パウロはエルサレム教会が、信仰故に受けている経済的困難を見ごしにできず、異邦人教会に対して、

「霊の恵みを受けたエルサレム教会に、支援献金をしよう。」

と呼び掛けました。ユダヤ人教会と異邦人教会を、その事によって、キリストの身体なる教会の一体性を具体化しようと努めたのです。そんなパウロに対して、偽教師は、コリント第Ⅱの12章16節から読み取りますと、

『パウロは悪賢い人間だ。エルサレム教会の支援献金と言う名目で、諸教会をだまして、献金を集め、あなた方コリント教会からもだまし取ったのだ。』

と非難しています。

しかし、この様な言葉に対して、  
「パウロ先生は絶対にそんな事をする人ではない。」

と反論する人がいなかったのかと思うと、悲しくなります。或いはいたのかも知れませんが、人

間は言葉巧みな、意見の強い人に、呑みこまれて行く傾向があります。そのために行ってはならない方向に進み、大きな後悔を引き起こす事があります。それは、言い出す勇気が無いと言う事ですが、その心には、それを言う事に依って、今度は自分がターゲットにされる事を恐れるのです。でも、その時こそ、

『自分は神様に生かされているのだから、神様の御心に従う力を与えて下さい。』

と祈って、力を与えられたいものです。

偽教師は、パウロがいないところでは、パウロの事を徹底的にこき下ろしています。

10章1節に、

「あなた方の間で面と向かっては弱腰だが、離れていると強硬な態度に出る、と思われている、このわたしパウロ」

と言っています。この事は、10節の言葉に繋がります。

「わたしのことを、

『手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると、弱々しい人で、話しもつまらない』  
と言う者たちがいる。」

とあります。偽教師と彼に同調する人々は、コリント第Ⅰの手紙を受け取って、パウロがキリストの使徒として、コリント教会の問題を憂い、率直に悔い改めや、改めるべき信仰生活指導を与えたことに対して、彼らは神様の前に遜ってそれを受け入れようとはしないで、パウロに対して、

「何を偉そうな事を言って、」

と言う、強い反発心を持ったのです。

パウロは今日誰もが認める、キリストの大使徒であり、パウロの様に意志の強い人はいません。でも、当時、パウロに接したコリントの人々は、7節にありますように、

「上辺だけを見て、彼の真価に気が付きませんでした。」

パウロは決して、カッコ良い、人目を引く様な風貌ではなかったようです。また、話すより、書く方が得意だった様です。一方、偽使徒は、体格も良く、話術にも優れていたようです。そのように、上辺を重んじる人々に対して、パウロは3節で答えています。詳訳聖書に依りますと、

「わたしたちは肉にあって、歩いて生活していますが、肉に従って、唯の人間の武器を用いて私達の戦闘を遂行しているのではありません。なぜなら、わたしたちの戦闘の武器は、物的なもの、血肉の武器ではありませんが、神の前で砦を滅ぼす、破る程、力のあるものなのです。」

と言っています。

イエス・キリストを信じ、神様を自分の生の保証者としている者も、地上にいる間は、肉体を以て生活しなければならないので、戦いがありますが、聖霊に支配され、導かれる事が出来ます。エフェソ書6章13節には、

「**神の武具を身に付けなさい。**」

と勧められています。真理の帯、正義の胸当て、平和の福音を告げる履物、信仰の盾、救いの兜、霊の剣である神の言葉を、求める生き方が示されるのです。聖霊を求めるなら、必ずその生き方は変わります。

一方血肉の武器、即ち、人間的な物差しで、価値を求める者は、その人を高慢にし、高慢と言う要塞を、高く高く築いて行く事になります。しかし、やがて、神様に倒されるでしょう。パウロは神様からの保証を頂いている事によって、敵対者達と同じ土俵には上りませんでした。そこで、パウロは12節で言っています。

「わたしたちは自己推薦する者たちと自分を同列に置いたり、比較したりしようなどとは思いません。彼らは仲間どうしで評価し合い、比較し合っていますが、愚かなことです。」

と言っています。

人は、自分や仲間内には甘いものです。人間の物差しは、その時の状況、都合によってクルクル変わります。外部では、《ダメ》と言ったことが、内輪では《良し》となることは、どこでも起こっていることです。そうして、

『自分達で甘い点数を付け合って、自分達の立派さを誇り、自分達の意に添わない存在を、非難するのです。』

パウロはそんなことは愚かなことだと言っています。ところが、13節を見ますと、パウロも、

「**誇る**」

と言っています。

「わたしたちは、**限度を超えては誇らず、神が割り当ててくださった範囲内で誇る。**」

と言って、何を誇るのかというと、

「**あなた方のところまで行ったと言うことで誇るのです。**」

と言っています。

パウロの誇り、それは何であったでしょうか。彼の誇りはただ、神様がなして、くださった**御業を誇る**事でした。パウロ達はコリント教会を開拓するのに、多くの祈りを捧げ、労しました。ユダヤ教徒達からの迫害や様々な攻撃を受けながらも、キリストに依る救いの福音を語り続け、コリント教会が生まれました。産みの苦しみをしたのはパウロでした。パウロはそこに、神様の憐れみと導き、助けを確信していたのですが、何よりもそれは、**神様がパウロに与えられた、宣教地であった**と言う確信でした。

パウロの宣教理念は、ローマ書15章20節に記していますように、

「このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないためです。」

と言っています。

神様によって、使徒達が福音を携え、遣わされて行く場所は、まだ、

『福音宣教が行われていない地であり、既に誰か他の人が基礎を築いた場所ではない』

と言う事です。それがまた、神様から遣わされた使徒職の証でもありました。パウロはここで、神様が未伝地のコリントまで導き、福音を伝えさせて下さった事を誇っているのです。

14節に、

「わたしたちは、あなたがたのところまでは行かなかったかのように、**限度を超えようとしているのではありません**」

とあります。わかりにくい表現ですが、

詳訳聖書では、

「私達はあなた方に対して、何ら正当な使命の無い者の様に、自分の領域の限界を踏み

越えているのではありません。」  
とあります。つまり、  
『神様からの使命も与えられないのに、勝手に自分で決められている領分を踏み越えて、コリントに行ったのではありません。』  
と言っているのです。

全ては、神様の導きであった証明は、  
「**実際、わたしたちはキリストの福音を携えてだれよりも先にあなたがたのもとを訪れたのです。**」  
と言っています。神様が福音の未伝地であるコリントに、パウロを遣わすとお決めになり、彼がコリントに行って教会を立てたのです。もしも、神様に従って働く、**忠実な使徒**であるならば、  
『**そのルールを守って、そこに侵入することは無い筈だ**』  
と言っているのです。

その罪を犯しているのは、パウロを非難している偽使徒です。かれは、パウロが築いたコリント教会に居座って、パウロの労苦を横取りしようとしていたのです。15節に、  
「**わたしたちは、他人の労苦の結果を限度を超えて誇るようなことはしません。**」  
と言うのは、敵対者のやっていることはしないと  
言っているのです。

「**ただ、わたしたちが希望しているのは、あなたがたの信仰が成長し、あなたがたの間でわたしたちの働きが定められた範囲内で、**」  
詳訳聖書では、  
「**委ねられた任務の範囲内で、益々増大すること。**」  
と有ります。

真実の使徒、パウロの願いは、コリントの信徒さんたちの、信仰の成長、霊的成長でした。そして、その先に、16節にありますように、  
「**あなたがたを越えた他の地域にまで福音が告げ知らされるようになること、**」  
と言って、パウロの福音宣教への幻はローマへと向かうのでした。

しかし、それも敵対者たちのように、他の人々の領域で成し遂げられた成果を、横取りして、如

何にも自分達が立ち上げた様な、そういうことを誇る事が無いようにと言っています。しかし、パウロにも誇りがありました。**自分を通して神様の御業が勧められる事が誇り**でした。それは決して自分を誇っているのではなく、**キリストを誇る**ことでした。その意味でパウロは、  
「**誇る者は主を誇れ。**」  
と言っています。

偽教師は、パウロを非難中傷する事によって自己を誇り、自己推薦をしました。しかし、神様に受け入れられるのは、  
「**主から推薦される人だ。**」と、  
『**神様こそより所である**』  
ことを強く訴えています。わたしたちも今日、競争社会の中で、比べ合う価値観の社会の中で生きています。何時、誰から、どんなことで、誹謗、中傷を受けるかも知れません。しかし、その時こそ、自分の生のよりどころを、**神様に置いて、悔い改めるべきところは悔い改め、自分は神様に愛され、尚、使命を与えられ、生かされていることに、生きる意味を置いて、神様のみを見上げて歩んで参りましょう。**

お祈りをいたします。  
憐れみ深い天の父なる神様

今日も私達を愛し、命と使命を与えて、生かして下さる恵みを感謝致します。

周りから人間の物差しで量られる事を意に介せず、神様の愛の眼差しを見詰めて雄々しく生き抜いて行く者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈りを致します。  
アーメン。